

人形姫

山本幸久

第十二回

十二

ポッポオ、ポッポオ、ポッポオ。

鳩時計から鳩があらわれて鳴きはじめた。午前十時だ。森岡恭平きょうへいの頭に落ちてきたのは三週間前、幸いにして鳩時計にはなんの損傷もなかった。

「で？ 慎次しんじのことでどんな問題が起きたんだい」

「それがあの」経理部長の幸田こうだは眉間みけんに皺しわを寄せている。苦渋くじゆうに満ちた顔とはまさにこのことだろう。息苦しそうでもあった。「どこからお話しすればいいのやら」

ふたりは背の低いテーブルを挟み、接客用のソファでむかいあわせに座っていた。それはいいのだが、幸田の頭の上から森岡人形の三代目と四代目、つまり祖父と父が並んで恭平を見下ろしていた。

幽霊ではない。額に入った写真が壁に飾ってあるのだ。ふたりとも「何事だ」という顔に見えるのは気のせいだろう。社長室ではなく、事務室にすればよかったと恭平は後悔した。

「結論から話してください」

「森岡人形はオシマイです」

そう言ったかと思うと、幸田は両手で顔を覆おおってしまった。予期せぬ答えに恭平は目が点になるばかりだ。

「弟のせいで、ウチの会社がオシマイになるって言うのかい」

「は、はい」

なにかに怯おびえるように、幸田は全身を震わせている。

「工場の件はやっぱり駄目だったんですか」

三週間前、東南アジアの某国でクーデターが起きた。慎次はその国に、フィギア工場を建設するつもりだったのだ。あとは調印式を残すのみだったが、旧政権の高官のほとんどは海外に逃げだし、国王はイギリスへ亡命してしまった。渋谷にある大使館とは連絡がつかず、フィギア工場の建設予定地はどうなったのか、わからないままなのだ。しかも弟はクーデターがあった翌日から行方不明と
きている。

「それはまだわかりません」

「ならば、なにがあったんです」

「慎次さんが工場をつくるために、この三年間で億を超える金を使っていた話をしましたよね」

「ああ」

交渉相手の政府高官達に手厚い接待をおこなっていたばかりか、袖の下まで渡していたという。とてもではないが、慎次自身の雑誌の原稿料やイベントの出演料程度でやりくりできるものではなかったらしい。

「そのお金の出所がわかりまして」

幸田は両手の指の隙間から、涙で潤うるむ目で、恭平を見た。若いお嬢さんならば抱きしめるところだが、相手は六十代のオジサンだ。

「どこだったんですか」

「ここです」

「ここって」と言ってから、恭平ははたと気づき、足元を指差した。

「ここか」

「ここです。五代目のご実家と本社がある百五十坪弱のこの土地すべてを担保に、慎次さんはお金を借りていたんです」

「それでいくら借りているんだ」

「五千八百万円です」

「いつか」

「一昨年の春です。この四月で丸二年になります」

「社長の俺を差し置いて、なんでアイツにそんな真似ができたんだ？」

「たしかに会社は五代目のモノです。しかし四代目がお亡くなりになったあと、会社の資産は五代目が、土地は慎次さんが相続なさったでしょう。お忘れですか」

忘れてはいない。男性としての機能が使いものにならなくなり、この先、家庭を持つことはあるまい、ならば土地があっても意味はないと思い、そっくりそのまま、弟に譲ったのだ。ほんとにいいんですねと弁護士に何度も念を押されたのも、思いました。

「二年前、慎次が自分の土地を担保に五千八百万円借りていたところまではわかりました。それがどうして我が社のオシマイになるんですか」

「昨日の夕方、だいかんやま代官山にでむいて、この三週間、フィギュア事業部に届いた慎次さん宛の郵便物をチェックしてきましたよ。百を優に超える数で、その中にこれが」幸田は両手を顔から離し、右手をスーツの内側に入れて封書を一通出した。「どうぞご覧になってください」

受け取った封書の中身をだす。三つ折りの紙を数枚、広げると、なによりも先に『さいこくしよ催告書』の文字が目飛びこんできた。送り主は不動産担保ローンの会社である。ざっと読み進めていくうちに、慎

次が四ヶ月前からローンの返済を滞納しているのがわかった。しかも今度の返済期日までに返済がない場合は、競売の手つづきを進めるとも記されている。

この日付って。

恭平は壁にかかったカレンダーに目をむけた。返済期日は三日前だった。

「この土地が売りにだされるっていうんですか」

自分ひとりだったらどうにでもなる。だが森岡人形はどうすればいい？ 職人達にどこで人形をつくれというのだ？

「進めているというだけで、まだそこまでは」

「つまりその、なんだ」一艇ありて一人なし、一艇ありて一人なし、一艇ありて一人なし。胸中で繰り返し言い、恭平は息を整え、自分を落ち着かせた。「滞納している分の金を払えばなんとかなるんじゃないのかな」

「それがそうもいかないようでした」

「なんでだよっ」

幸田がビクリと身体を震わせるのを見て、恭平は自分が声を荒らげたことに気づいた。

「ご、ごめん、幸田さん」

「だ、だいじょうぶです。それなので、今朝方、市内にいる知りあ

いの会計士の事務所へいきまして、他人に相談された体で訊ねてみたんです。そしたら催告書のつぎは、期限の利益喪失の通知なるものが届くとかで」

キゲンノリエキソーシツノツーチ。耳慣れない言葉だ。しかし恭平には禍々しい呪文のように聞こえた。

「なんですか、それは」

「細かい説明を受けたのですが、要するにローンは取り消され、いまずぐ全額耳を揃えて返さなければならなくなるそうで」

「待ってくれ。分割して返せないものが、全額返せるはずがないだろ」

「私も会計士におなじことを言いました。すると、だからこそ貸した側としては、これ以上の損失をださないよう、土地を競売にだすのだと言われまして」

なるほどとは思う。だが納得している場合ではない。そのソーシツの通知がきたら、五千何百万円だかをまとめて返さないかぎり、この土地を奪われてしまうのは確実なのだ。

「それだけではありません。他にもまだ慎次さんはお金を借りていらしたようで、督促状だけでも七通届いていました。まだあります。材料費その他の未払いもいくつかりましたね。それとそう、代官山の事務所の賃貸料も三ヶ月滞納していました。あわせて五百万円

だかを、今月の二十日までに支払わないと、月末にはファイギュア事業部はあそこをでていかなければなりません」

マジか。

「どうしましょう、五代目」

一艇ありて一人なし、一艇ありて一人なし、一艇ありて一人なし。

「なんでそんなに慎次のヤツは、金に困ってたんですか？　ファイギュア事業部は年間で十億は稼いで、右肩上がりのイケイケだったじゃないですか」

「そのへんも疑ったほうがいいのでは」

「なに言いだすんだ、幸田さん。疑うもなにも、あなただってファイギュア事業部からの決算書に目を通して」そこで恭平は言葉を止めた。幸田がなにを言いたいか、気づいたのだ。「決算書自体、嘘の数字だったっていうんですか」

「いまとなってはじゅうぶん考えられます」

「慎次のヤツはなんでそんな真似を」

「わかりません」と答えてすぐに、幸田の表情が微妙に変わったのを、恭平は見逃さなかった。

「心当たりがあるんですか」

「慎次さんに口止めされていたことがまだありまして」

「お金のこと？」「ではなくて」

「なに？」「兄貴には負けたくない」と

「俺に？」

「はい。お酒が入ると必ずおっしやっていました。その度に、兄貴には言わないでくれと頼まれたものです」

今朝、フィギュア事業部の服部はっとりに聞いた話を思いだす。

これで兄貴みたいになれる。

弟の慎次は購入したローイングマシンが届いたとき、そう言ったらしい。

俺には負けたくなくて、俺みたいになりたいって、なに考えてんだ、アイツは。

恭平はうしろに倒れ、背もたれに寄りかかった。祖父と父が自分を睨にらんでいるのに気づく。それもやけに非難がましい目つきだった。

「俺ですか。俺が悪いんですか」

気づいたら、祖父と父の写真にむかって叫んでいた。

「とんでもないっ。社長は少しも悪くありません」

幸田なだが宥めるように言う。悲観し切ったその顔を見て、恭平は申し訳なく思った。

「ちがうんだ」

あなたにはない、祖父と父に言ったのだと言いかけたが、やめておいた。あまりのことに正気を失ったと思われかねない。

ふたたび祖父と父を見上げる。すると目つきが変わっていた。睨むというより見下し、挑発しているかのようだ。さらに祖父と父は声を揃え、こう言った。

おまえにこの窮地きゆうちを脱することができるとか。できまい。人形を満足につくれないばかりか、会社も守れやしない、おまえは所詮、その程度の人間なのだ。五代目？ ふざけるな。跡取りをつくることさえできないくせに。

「どうなさいました？」

幸田が心配そうに言うのが聞こえた。その声は怯えているようでもあった。恭平は祖父と父の写真から、幸田に視線を移す。

「幸田さんは親父のこと、憎く思ったことはありませんか」

「私が四代目を？ どうしてです？」

「だって親父に破門されたんでしょう」

「仕方ありませんよ。私が三年経っても満身に仕事をおぼえられなかったんですし。そうか、このあいだ峰みねさんが破門だなんて大袈裟おおげさに言ったから、そうお思いになったんですね。四代目はね、これ以上やっても意味がない、べつの職業に就いたほうがおまえのためだって、そりゃあもう、親身になっておっしゃってくださいなんですよ。そのとき私は、このひとのために働こう、職人としては使い物にならなかった、そんな自分でもなにかできることがあるはずだと

思いました。だから峰さんに泣きついて、いっしょに四代目をお願いしてもらって、事務方として残ったんです。四代目には感謝しかありません。憎く思うなんてとんでもない。バチがあたりますって」

「ならば森岡人形をオシマイにはしたくないでしょう」

「もちろんです。でもこのままだと」

「お願いします。森岡人形を救ってください」

「わ、私ですか」

「あなたは職人としては失格だった。でも、いまや社内のだれよりも森岡人形のことを知り尽くしているではありませんか。しかもこの三十年間、経理一筋でやってきた。そんなあなたならば、この危機を回避できるはずです。ちがいますか。まだ打つ手はある。オシマイだなんて諦めるのはまだ早いですって」

幸田にむかって言いながら、恭平は自分自身にも言い聞かせていた。

「弟がどれだけ借金をしているのかが知りたい。その総額を把握はあくするためにリストをつくりましょう。私も手伝います」

「慎次さんの借金を肩代わりなさるおつもりですか」

「肩代わりじゃない、尻拭いしっぽ拭いです。アイツはウチの社員ですからね。」

社員のやらかしたことは社長の私が責任を取らねばならんでしょ」

幸田からの返事がない。その代わりかどうかかわらないが、恭平

の顔をじっと見つめたままだったのだ。

「幸田さん？」と声をかけると、彼の頬に涙が伝っていった。「ど、どうしました？」

「いえ、その」幸田は手の甲で涙を拭った。「四代目のことを思いだしてしまいました。おなじことをよくおっしゃっていたんですよ。責任はぜんぶ私取る、だから社員のおまえ達は大船に乗った気でいればいいって」

大船か。俺にはボートが精一杯だ。しかも必死にオールを漕がねばならない。

「リストをつくるのは賛成です。でもまずは不動産担保ローンの会社に連絡を取りませんか。慎次さんがこの三週間、行方不明だったことを説明したうえで、交渉してみるというのは」

幸田が言った。いままでとはちがう、凛ひんとした張りのある声だ。「そうしましょう。それとそうだ、代官山の事務所の大家さんとも早急に話をつけたほうがいい」

「滞納分の五百万円、払うおつもりですか」

「仕方ありません」

「来月以降はどうなさいます？ 月々百七十万円以上ですよ？」

無理だ。頭ではすぐ結論がでた。だが今月一杯で引き払うのも無理だろう。だいたい引越先はどうする？ 最悪、ここしかない。

だがここだって、事と次第によっては競売にだされ、失いかねないのだ。そうなればフィギュア事業部どころか、森岡人形自体が存続の危機である。

やっぱりオシマイだ。

いやいや、ここで弱気になったら、それこそほんとにオシマイだぞと、恭平は自分に言い聞かせた。

「とりあえず来月までは借りておきませんか」

「わかりました。でもあまり問題を先送りになさらないほうがいいと思います。一日の遅れで、何百万何千万のお金を失いかねませんので」幸田が神妙な面持ちで言う。「それとこの件に関して、みなさんにはいつお話しになりますか」

「ある程度、目処めどがついてからにしよう」

「はつきり日にちを決めておくべきだと思います。秘密裏にことを進めるのは限度があります。なにせ職人達は勘がいいですからね。

あの国のクーデター以降、慎次さんと連絡が取れないことは知っていますし」

「十日後、いや」どうせいつまでも隠し通せることではないのだ。

「一週間後はどうですか」

「了解です。それまでできるだけふだんどおりに振る舞うことにし

ましよう」

いい感じだぞ。

恭平は胸の内で呟く。右手に構えた小型のビデオカメラを覗きながらだ。四月に入り、鐘撞高校ボート部の練習がはじまる前日、鐘撞駅前にある家電量販店で購入したのだ。二万三千円とまずまずの値段だったが、自腹を切った。コーチとして訪れるときは、曳抜川の水面を走る部員達を必ず撮影する。さらに練習後にはノートパソコンに繋ぎ、部員達と見ながら今後の改善点を話しあうのだ。

いまカメラで追っているのは、二・三年生男子五人の舵手つきクオドルプルだ。息がピッタリでオールの動きもキレイに揃っていた。速度も速い。好タイムが期待できそうだ。

「がんばってええ」「鐘撞高ボート部、ファイトオオ」

やや離れたところで女の子数人が声をあげている。少し照れ臭そうなのが初々しくていい。練習の場に女の子が応援に訪れたのは、恭平がコーチになってからはじめてのことである。普段着だが、鐘撞高の子達らしい。

「知ってました、キャプテン」熊谷良隆だ。恭平の真横で双眼鏡を目に当てながら言った。「今日きてる子達のひとりだが、いまのキャプテンのカノジョなんですよ。一学年下で、春休みに入ってすぐコクられて、その翌日にはふたりで東京デイズニールゾートにいつてき

たつて言うんですよ。どう思います、キャプテン？」

どうもこうもあるものか。青春そのものである。

「マジうらやましいですよお。ここ最近、代官山の子達と交流する機会が増えて、このあいだなんか女の子ばつか五人引き連れて、フランス料理のランチを奢ったおこのに、イマイチ手応えがなくて」

「奢ってないだろ。そのランチの領収書を持ってきて、幸田さんにさんざん説教されて、結局は俺があいだに入って、今回だけって経費で落としてやったのを忘れちゃったのか」

「やだなあ、忘れていませんよ。キャプテンには感謝しています。あまりに軽い調子で、とても感謝しているとは思えない。ランチの領収書は六人で二万数千円にもなった。弟の借金の件がわかったいま、恭平にはその金も惜しいように思えてくる。」

「それ、代官山の子達に言ってませんよね」

しばらく間をあけて、良隆が確認するように言う。

「言わねえよ。だいたいおまえ、メシなんかで釣ろうとする性根が浅ましいんだよ。もっとべつの方法で攻めたらどうだ」

「手は打ってます」

「どんな手だ」

「ランチのとき、関東マスターズレガッタに応援に来てほしいって誘っていたんですよ。そしたら三日前、本社にきていた服部さんに

必ずいきますからって、正確な日付と場所を訊かれましてね。俺が言ったら、その場でメモ帳にメモってました。これ、ぜったい脈ありますよね。そう思いませんが、キャプテン？」

みんなは社長を応援したいって言ってます。

三日前の朝、服部にそう言われたのを思いだす。だが良隆には黙っておくことにした。

「服部さんって、変なコスプレしているんで、ヤバイ子かなと思っていたんですが、話してみるとフツーにイイ子さんですよねえ」

「コスプレじゃない、ゴスロリって言うんだ、ああいうのは」

「どちらがうんです？」

良隆に聞き返されたものの、説明するのが面倒で、恭平は聞こえないフリをした。

いい加減、腹が立ってきたというのものもある。良隆のあまりの呑気のんきさに、会社がいま、どんな瀬戸際に立たされているのか、ぶちまけようかと思っただけだ。だがその気持ちを必死に抑え、ボート部の後輩の姿をビデオカメラで追いつづけた。

弟の借金の件を幸田から知らされたのは二日前の木曜だ。その日のうちに代官山へでむき、弟の借金の洗いだしに取りかかった。ガラス張りの部長室で、弟の机を幸田と漁あさるのは気が引けたものの、

やむを得ない。フィギュア事業部のスタッフには、弟に頼まれたのだと話したものの、信じてもらえたかどうかはわからなかった。みんなひたすら無言で、恭平と幸田のことなど見向きもせずに、各々の作業を進めていたからだ。

弟は銀行に信用金庫、ローン会社など十二社から借金をしており、その総額は三千二百万円にもなった。未払い分の請求書も多かった。五十通は優に超え、上は三百数十万円、下は一万円程度と額にばらつきがあり、ぜんぶで二千五百万円ほどだった。これに不動産担保ローンで借りた五千八百万円と事務所の家賃滞納分五百万円を足すと一億二千万円である。

そんなものかと恭平は思った。計算しているうちに、金銭感覚がマヒしてきたのだ。それにたかが一億二千万円で、来年創業百二十五年の会社が潰れるはずがないとも思ったのだ。なんの根拠もなく、返せるアテもないにもかかわらずだ。

実際のところ、鐘撞に戻って、ひとり住むには広過ぎる一軒家に帰り、冷静になると、たかが一億二千万円で、来年創業百二十五年の会社を潰すことになるかもしれないと、じわじわ恐怖が襲ってきた。夜もなかなか寝付けず、二時間置きに目覚めるほどだった。

不動産担保ローンの会社には一昨日の木曜に電話をして、昨日の金曜の午後二時に約束を取りつけ、幸田とふたりで足を運んだ。場

所は品川で、三十何階だかにオフィスを構えており、眼下に広がる東京の町並みはミニチュアにしか見えないほどだった。

担当者は恭平や慎次よりも若い、三十歳前後と思しき男性だった。恭平と幸田の話に何度も頷うなずきながら、にこやかに聞いていたが、目は笑っていないかった。そしてふたりの話がおわると、彼はこう言った。

事情はよくわかりました。それでローンのお支払いのほうは、お兄様が引き継ぐということでもよろしいのでしょうか。

淡々とした口ぶりは、ビジネスライクそのもので、少し面倒くさそうでもあった。わからないでもない。恭平達にすれば人生の瀬戸際であっても、彼にすればただの仕事なのだ。この程度のトラブルはよくあることなのかもしれない。

よろしく願います。

恭平にすればはじめからそのつもりだったのだ。この先、弟がひよっこり帰ってきたとて、本人に返済能力があるとは思えないからだ。三十五年のローンで、返せない額ではなかった。なんであれ土地を手放すわけにはいかないのだ。他に道はない。

テーブルの上に何枚も書類を並べながら、担当者は今後の流れについて説明をはじめた。これまたビジネスライクで、冷たい印象さえある話し方だった。ただし要点がわかりやすく、一度聞いただけ

でも、すんなり理解できた。なにはともあれ手続きをするためには、恭平のほうで必要な書類を取り揃え、月末までにもう一度、足を運ばなければならぬのだが、それさえクリアできれば、土地を競売にかけるという最悪の事態は逃れることができるのはたしかだった。オフィスをでてエレベーター前まで、担当者は付き添ってきた。そして下へのボタンを押すと、恭平にむかってこう言った。

じつは私、森岡人形さんのフィギュアのファンですね。オバケデイズの食玩しよくがんはすでに芸術の域に達していると思っています。それとあと、弟さんのイベントにも何度か参加したことがあります。

その顔はみるみるうちに紅潮し、鼻息が荒くなっていった。今まで押し殺していた感情が、一気に噴きだしてきたらしい。遂ついには恭平の右手を両手でがっしり掴つかんできた。

弟さん、早く見つかるといいですね。私、できるだけサポートします。だからぜったいフィギュアをつくりつづけてください。

涙目でそう訴えられたとき、恭平は慎次つらやが羨ましくてたまらない気持ちになった。フィギュア事業部が製作販売する商品が人気だと、『フィギュアキング』やネットの情報では知っていた。荒川くんや井上くんのような子ども達からも聞いた。でも大人のファンの生の声を聞いたのははじめてだったからだ。

兄貴には負けたくないだ。なに言っついでやがんだ、まったく。

おまえのほうが圧勝もいいところじゃねえか。

「ロオオオオキヤツチ」「ロオオオオキヤツチ」「ロオオオオキヤツチ」

恭平と良隆は曳抜川の水上にいた。競技用のふたり乗りボート、ダブルスカルを漕いでいる。船首側のバウが良隆、船尾側のストロークは恭平だ。

六月の関東マスターズレガッタまで二ヶ月を切った。それまでに良隆とふたり、こうして実際にボートを漕ぐ機会はないはずだ。一回一回の練習をきちんとこなし、優勝は無理にしても恥ずかしくない記録をだしたいと考えている。

「いい感じじゃねえか、良隆っ」

「ありがとうございますっ」

ついこのあいだまでは、恭平に怒鳴^{どな}られてばかりだったが、ここに来てだいぶマシになった。仕事帰りに自宅近くにある公民館に立ち寄って、市民対象のスポーツジムで鍛え、さらには室内プールで二、三百メートル泳いでもいるらしい。やるべきことはやっているのだ。代官山の子達にイイところを見せるという、大いなる野望があるからだろう。

恭平自身、二十年近く昔の勘はすぐに取り戻せた。しかし問題は

スタミナだった。なにしろ瞬またく間まにへばってしまふのだ。しかもオイルを漕いでいるあいだ、自分の腹が邪魔でならなかった。そこでコンビニで買う食事はカロリー低めのものを中心にし、ほぼ毎日ジョギングをかかさず、そして自宅のガレージで朝昼晩とローイングマシンを漕いだ。おかげで基礎体力がつき、減量もできたので、ずいぶんと身軽にもなった。

ローイングマシンはもともと高校の頃、お年玉で購入したモノである。ただし今朝はちがった。十五万円以上する最新型だ。代官山の事務所にあつた弟のを、一昨日、持ってきたのである。もちろん行方不明の本人に許可の取りようがない。借金の総額を計算しおえて部長室をでる間際、目の端に見えるや否や、気づいたら抱え持っていたのだ。どうしてかは自分自身でもよくわからない。持ちだして車に積みこんだ際、幸田は訝いがしげな顔をしながらも、なにも言わなかった。ただしそのあとだ。

良隆くんとふたりで、ボートの大会に参加なさるってほんとはどうか。

鐘撞へ戻る車中で幸田が訊ねてきた。

こんなときにマズいですかね。

とんでもありません。きつと四代目とおかみさんがよろこんでいらっしやいますよ。

親父とおふくろが？ どうしてです？

高校でせっかくインターハイまでいっておいて、なんで大学でやらなくなったんだ、勿体ない^{もったい}って、ふたりともよくおっしゃっていましたもの。おかみさんはね、若い娘さん達といっしょに五代目を応援するのがお好きでしたからね。そうそう、観客席で五代目の母親だって名乗ったら、サインをねだられちゃったのよって、それはもう、うれしいそうにお話になっていたこともありましたっけ。

母親が応援にきていたのはたしかだ。だがサインの話は初耳だった。

おふくろはともかく、親父はインターハイどころか県大会にだって、一度もきてませんよ。

私が試合の模様をビデオカメラで撮影したのを、ひとりでご覧になっていたんです。それも繰り返^さし。酒の肴^{さかな}にいちばんだっておっしゃっていました。

もちろんこの話も初耳だった。

十八歳で家をでたあと、いや、それよりも前、中学二年くらいから、両親とはまともに口をきいた覚えがない。引きこもりで高校を中退し、親父の仕事を手伝っていた弟のほう^が、両親といっしょだった時間がずつと長い。しかし実家に戻って十年近く、弟から両親の話^{めった}を聞いたことがなかった。そもそも弟と話す機会が滅多^{めった}にない

のだ。ふたりきりともなれば尚更である。

「キャプテンツ、テンポあわなくなってますよっ」

いかんいかん。

両親と弟のことを考えていたせいで、オールを漕ぐ手が疎かにな
つてしまったのだ。おろそ

「すまんっ」と詫^わびて、テンポをあわせようと顔をうしろにむけた
ところだ。良隆のオールがピタリと止まった。

どうした？ と訊ねようとしたときだ。

「五代目ええええ」「社長おおおお」

河川敷から声がした。宮沢だ。彼ひとりではない。職人達がほぼ
揃っていた。ゴスロリの格好は服部にちがいない。他にも代官山の
子達が六、七人いるようだ。突然あらわれた謎の集団に、現役のボ
ート部を応援にきた女子高生達は引いているというか、ビビったら
しく、河川敷から土手へあがっていた。

「お、俺達の練習、見にきてくれたんですかね」

良隆がうれしそうに言う。声が弾^{はず}んでもいた。恭平も一瞬そう思
ったものの、気になることがあった。職人と代官山の子達の中に幸
田がいたのだ。いてもべつにいい。だがどうも様子がおかしい。遠
目なので表情までは読めない。だが彼がへこへこ頭を下げているの
はわかった。

まさか、あのひと。

そのまさかだった。

幸田は弟の借金について、しゃべってしまったのである。それも洗いざらいぜんぶだ。

「どこでその話を？」

「鐘撞駅前の中華料理店です」

恭平の質問に、フィギュア事業部の服部が答えた。

「昨日、トーキョーローカルサイキックの打ちあわせをおえたあと、みんな夕飯食べにいったんですよ」

つづけて着付師の遊木ゆぎが言う。ゴスロリの服部と着物姿の遊木が並んで立っていたのだ。それだけでもじゆうぶんカオスだった。女子高生が逃げていくのもわからないでもない。

「五代目も誘いましたでしょう」

頭師の峰が言った。そうだった。恭平は社長室で弟の借金の算段をしている最中だったので、断ったのだ。

待てよ。そのときは幸田もいっしょだったぞ。

「幸田さんは一時間半ほど遅れていらしたんです」

恭平の疑問を察したかのように服部が言う。

「そんな会があったなんて、俺、知らなかったぜ」良隆だ。彼は昨

日、ゴールデンウィークにおこなう男雛女雛おびなめびなの新作コンテストの打ちあわせのために、午後から郊外にあるショッピングモールにでかけて、そのまま直帰だったのだ。「なんで俺、呼んでくれなかったのさ」

「メールを送ったろ」息子の文句に道隆が応じた。「これからみんなでメシいくぞって」

「みんなに代官山の子達が含まれているとは思わなかったんだよ」

「でも良隆、そのときにはもうガールズバーに」

「親父、それ、いま言う必要がある？」

「しゃべるつもりはなかったんです。というか、しゃべらされてしまったわけでした」

「なに言ってるのよ、幸田さん」阿波三姉妹あわの長女、須磨子すまこだ。「そうよ、慎次さんはどうしたのかしらって私達が言ったら」と二女の勢津子せつこ。「自分からしゃべりだしたんじゃないの」「これは三女の多香子たかこである。」

「いや、だって五代目」幸田は縫すがるような目つきになる。「かけつけ三杯だって、紹興酒しやうきやうしゆをグラスで立てつづけに三杯呑まして、へべれけになったところで、あれこれ訊きいてくるんですからね。そりゃあ、しゃべっちゃいますって」

しゃべるなよ。

「水臭いじゃないですか、五代目」宮沢が恭平ににじり寄ってきた。「どうしてそんな大事なことを内緒にしていたんです？」

「どれだけ借金があるのか、まずは社長である私が把握できてからと。そのためには少なくとも一週間は必要だと思ったもので、けっして内緒にしていたわけではありません」

「私もおんなじことを言ったんですよ。なのにだれも信じてくれなかったんです。ヒドくありません？」

ヒドいのはあんただと言いかけ、恭平はぐっと堪^{こた}える。幸田の気持ちも多少はわかった。不安でだれかに言わずにはいられなかったのだろう。それならそれで、のこのこと酒席にいかなければよかったのだ。まったくもってやれやれである。

「返せるアテはあるんですか」

服部が訊ねてきた。射るようなその視線に、恭平はいささか怯^{ひび}んでしまう。

「そのへんはいま模索中なんだ。だがひとつだけ、はっきり言えるのは、人員を削るつもりはないってことだ。きみ達ひとりひとりが、我が社の財産だからね。いままでどおり働いてもらう。それだけは信じてほしい」

「ニセンニヒャクマンエン」

宮沢だ。さらに距離を縮め、恭平の両腕をがっしり掴んできた。

呻くように言ったその言葉が、二千二百万円だと気づくのに数秒を要した。だがわかったところで、わけがわからないのはおなじだ。

「はい？」

「ウチの家と土地、売りにだせば二千二百万円の金になるって、娘が言っております」

その金で宮沢の娘夫婦は、いま住んでいる西伊豆に家を建てるつもりだった。いっしょに暮らそうとまで言われたものの、死ぬまで森岡人形で働くので、鐘撞を離れるつもりはないと首を縦に振らなかった。

「その金、寄付しますんで、森岡人形のためにまるまる使ってください」

なにを言いだすのだ、このひとは。

「だったら私の家も売って、会社に寄付させてもらうわ」宮沢に対抗するように須磨子が言った。「ウチだって、二千万円くらいにはなるはずよ」

「駄目よ、スウ姉さん。自分の頭や身体が思うようにならなくなっ
たとき、施設に入るための資金にするんだって言ってたじゃない」

「猫ちゃん達はどうするの。最近また増えたって、真純ますみちゃんから聞いたわ。そうだ、それこそ真純ちゃんはどこに住めばいいの？」

「猫はネットで里親を募るわ。真純ちゃんには悪いけど、どこかア

パートに引越してもらって」

真純ちゃんとは溝口真純のことだ。姉妹の話を知っているうちに、彼女の姿がないことに恭平は気づいた。もうひとり、職人がいない。

髪付師の久佐間だ。

「スウ姉さんは？」「そうよ、自分はどこに住むつもり？」

妹ふたりに言われ、須磨子は答えずにいた。どうやら自分のことを忘れていたらしい。

「宮沢さんに須磨子さん、おふたりの気持ちは大変、うれしく思います。でもそれはできません。会社の不始末を社員の私財で穴埋めするなんて」

「それが水臭いって言うんですよ」宮沢はまだ恭平の腕を掴んだまま、握力が増して痛いくらいだ。「いまこそ恩返しさせてください。

お願いしますって」

「宮沢さんも、あの家を売ったら住むところがないでしょう」

「仕事場に寝泊まりさせてください」

「そうだわ」須磨子がぱんと手を叩いた。「だったら五代目、私を自宅に居候いせうこうさせてくださいな。なんでしたら真純ちゃんもいっしょに」

「莫迦ぼか言わないでください。そんなこと、できっこないでしょう」

「莫迦は慎次さんでしょうが、坊ちゃん」宮沢が訴えるように言う。

呼び名が五代目から坊ちゃんに変わった。「さんざん自分の好き勝手やってきて、森岡人形が傾きかけるほど借金つくって、それがバレそうになったら行方をくらまして、坊ちゃんに尻拭いさせて、いたいどういうつもりだっ、ふざけるのめたいがいにしろって話です」

「それはちがう、宮沢さん。けっして好き勝手やってたわけじゃない。慎次なりに考えがあつて」

「慎次なりに考えがあつて」恭平の言葉を宮沢が繰り返す。「四代目もおんなじことをおっしゃいましたよ。言っちゃなんだが、いまの坊ちゃんよりも慎次さんのほうが、ずっとイイ顔を描けていましたからね。あのままつづけていれば、いまごろは四代目に勝るとも劣らない頭師になっていたでしょう。それをフィギュアなんぞにウツツを抜かして、あまつさえ部署をつくりたいだなんて言い出した。

俺は反対だったんだ。ところが四代目がこうおっしゃった。慎次なりに考えがあつてやるんだ、好きにさせようって。好きにさせた結果がこれでしょう？　ちがいますかっ」

「およしなさいって、宮沢さん。そんな昔の話を、いまここで蒸し返さなくてもいいでしょうが」

止めに入ったのは遊木だ。峰や熊谷父子がいつしよになって、恭平から宮沢を引き離そうとしたが、なかなかそうはいかなかつた。

宮沢はなおも話しつづけ、その声は甲高かんだかくなっていく。

「そりゃあ、たしかに森岡家あつての森岡人形でしょうよ。でもね。四代目も坊ちゃんも慎次さんも勝手過ぎやしませんか。森岡人形はあんた達だけのモノじゃないんだ。俺だって森岡人形のために六十年近く、身も心も捧^{たく}げて働いてきたんだ。森岡人形が好きだって気持ち^{せき}はだれにも負けてないんだっ」

「私だって」服部が叫んだ。みんなの視線が自分に集中すると、彼女は照れているというか、困った顔になりながらも、ひとつ咳^{せきばら}払いをして「私達ファイギア事業部だって」と言い直した。「日本人形の職人さん達みたいに何十年も働いていませんが、それでも森岡人形が好きだって気持ちは変わりありません」

「お、おまえさん達のことをどう言っているんじゃないかって、つまり、その」

さきほどまでの勢いが瞬く間に失せ、宮沢はしどろもどろになった。恭平の腕からも両手を放す。

「だけどやっぱり部長は勝手だと思えます」

「だ、だよな。ほら、坊ちゃん。ファイギア事業部の子もこう言ってるじゃないですか」

「そこで社長」服部は恭平を真正面から見据えた。「ファイギア事業部を代表して、提案があるのですが、聞いていただけますか」

〈つづく〉